

成長のキセキ  
チーム力向上委員会

私とシゴト

地域での早期再生を推進する挑戦者たち

# 情熱と やりがい

情熱座談会

歴史で振り返る  
我が社の魅力と未来

半世紀以上、脈々と継承するOCスピリッツ

特集「東日本大震災」

被災地の復興に向けて



第2号 2014年5月発行 株式会社オリエンタルコンサルタンツ 本社 〒151-0071 東京都渋谷区本町3丁目12番1号 住友不動産西新宿ビル6号館 TEL:03-6311-7551(代) FAX:03-6311-8011

## 編集後記

たくさんの方にご協力いただきました。ありがとうございました。

- |  |   |   |  |   |
|--|---|---|--|---|
| <br>SC事業本部 九州支店<br>技術部 次長<br>石倉 昇さん ▶05ページ<br>座談会に参加し、OCの歴史を生々の声として聞くことができた。また、ベテラン社員の情熱の高さに驚きを受けた(私も見習わなければ…)。                       | <br>SC事業本部 関東支店<br>国土整備事業部門 副部門長<br>松金 伸さん ▶11ページ<br>今年の夏休みに息子と新湊大橋を渡る約束を守ります。         | <br>SC事業本部 中部支店<br>技術部 担当次長<br>安藤 誠さん ▶12ページ<br>良い思い出を振り返り、未来への挑戦への活力が湧いてきた!! そんな企画に感謝…。                                   | <br>SC事業本部 中部支店<br>技術部 副主幹<br>高瀬 弘さん ▶12ページ<br>情熱とやりがいにあふれていた日進JCTの取材を通じて当時は振り返り、初心に戻った気分ががんばります。                       | <br>SC事業本部 中部支店<br>技術部 担当次長<br>増淵 秀司さん ▶12ページ<br>奥さん、恋人、家族、友達を大切にするとともに、みんなが生き甲斐、誇りがもてることを期待します。                             |
| <br>SC事業本部 関東支店<br>都市地域創生事業部門 道路技術部長<br>中嶋 一雄さん ▶13ページ<br>取材写真は、見た目の印象があまりよくないのどびりの笑顔にしてみました。普段も見た目ほど悪人ではありませんので、気軽に声をかけてください。        | <br>SC事業本部 九州支店<br>事業企画部 主任<br>吉永 亨さん ▶14ページ<br>楽しく仕事をしましょう! 外での写真撮影は恥ずかしすぎました…。       | <br>GC事業本部 プランニング事業部 都市地域開発部<br>防災・観光開発グループ 技師<br>太田 陽子さん ▶15ページ<br>インタビューで、仕事をしたいという気持ちの原点を思い出させてくれました。これからも初心を忘れずにいたいです。 | <br>GC事業本部 プランニング事業部 交通計画部<br>ICT-スマートコミュニティグループ 次長<br>加藤 宏承さん ▶16ページ<br>自分の喋ったことが活字になることはないの、大変新鮮でした。10年後に読み返してみたいですね。 | <br>GC事業本部<br>総合開発事業部 港湾部長<br>並木 広己さん ▶17ページ<br>後5年で定年となるのに、「情熱・やりがい」を伝えるのは、もっと若い人を対象に取材されたほうが良いのではと思いつ、昔を思い出して年をとったと実感しました。 |
| <br>GC事業本部 プランニング事業部 都市地域開発部<br>都市地域計画グループ 次長<br>佐々木 英之さん ▶18ページ<br>計画の仕事はおもしろいですよ! 都市地域計画グループでは、総合計画、平和構築・復興支援、ガバナンス支援、環境管理をやっています。 | <br>SC事業本部 東北支店<br>技術部 主監<br>古賀 秀幸さん ▶19ページ<br>震災緊急点検の現場MT。震災翌日に降った雪が残っており、寒かった…。     | <br>SC事業本部 東北支店<br>震災復興推進室 室長<br>宮本 直樹さん ▶21ページ<br>昭和61年に入社以来、いつも「やりがい」を持って仕事してきました。今後は、それを伝えたい気持ちでいっぱいです!                | <br>SC事業本部 東北支店<br>技術部 上級技師長<br>藤原 重雄さん ▶23ページ<br>被災地で暮らし、人の強さと暖かさを感じ、真の復興に向け、知恵を出し、汗をかいています!                          | <br>SC事業本部 関西支店<br>技術一部 担当次長<br>岸田 こそえさん ▶27ページ<br>うちの部長と担当次長は「情熱(右)」と「やりがい(左)」を語る名コンビです♥                                   |
| <br>SC事業本部 九州支店<br>技術部 技師長<br>松崎 宏文さん ▶27ページ<br>レビューを通じて、若手技術者の成長を感じております。これからも多くの人と技術交流できることを楽しみにしています。                            | <br>SC事業本部 関西支店<br>技術一部 技術主査<br>青木 寛匡さん ▶27ページ<br>まだまだやりたいことがあるので、これからも頑張ります。        | <br>SC事業本部 関西支店<br>技術一部 担当次長<br>井川 忠さん ▶27ページ<br>青木さん(左隣)は、次と同じで思うがままに突っ走る性格ですが河川分野を牽引する頼もしい人材です!                        | <br>GC事業本部 道路交通事業部<br>道路計画部 技師<br>鈴木 悠介さん ▶28ページ<br>10年後に、今の自分を笑ってあげたいです。   | <br>GC事業本部<br>営業部<br>高井 由佳さん ▶28ページ<br>今回のインタビューを通じ、改めて職場のみなさんのありがたさを感じました。  |
| <br>SC事業本部 総合マネジメント事業部<br>プロジェクトリーダー<br>蒲田 直子さん ▶29ページ<br>社員から取材を受けるのかと思っていたら、外部の方だったので緊張してしまいました。                                  | <br>SC事業本部 関東支店<br>事業企画部 担当次長<br>堀川 和人さん ▶29ページ<br>仕事半分、私生活(シゴト)半分で、これからもコツコツと頑張ります。 | <br>SC事業本部 関西支店<br>事業企画部 主任<br>中田 邦彦さん ▶29ページ<br>ワンゲルは、まだレッドリスト掲載活動です。たくさんのご参加をお待ちしています。                                 | <br>SC事業本部 関西支店<br>技術部 技師<br>末次 優花さん ▶29ページ<br>会社のみなさんと楽しく山登りしています。山頂で食べるおにぎりは最高です。                                   | <br>GC事業本部<br>営業部<br>青木 哲也さん ▶30ページ<br>入社して一年が経ちましたが、一年よりも成長できるように頑張りたいと思います。  |



## 情熱座談会

# 歴史で振り返る 我が社の魅力と未来

～半世紀以上、脈々と継承するOCスピリッツ～

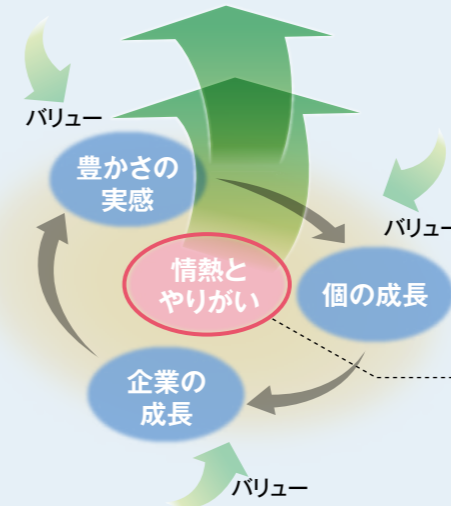
経験豊富なベテラン技術者と、働き盛りの中堅・若手社員8名による座談会を行い、創立からの歴史を振り返り、我が社の魅力やこれまで大切にしてきた価値観を踏まえ、今後の成長に向けたビジョンを語っていただきました。



## 『情熱とやりがいプロジェクト』とは？

我が社では、真に魅力ある企業へ成長するための原動力である役職員一人一人の“情熱とやりがい”をさらに高めるために、『情熱とやりがいプロジェクト』として、8つの経営施策を総合的に実践しています。

真に魅力ある企業へ  
【さらなる社員満足、顧客満足、社会貢献】



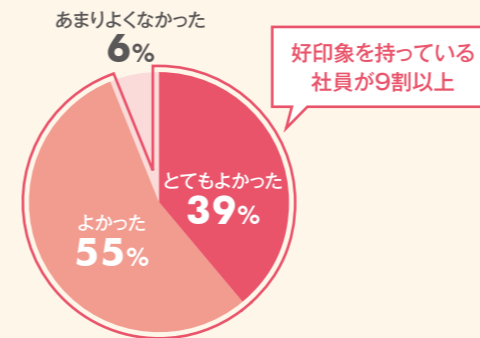
## 8つの経営施策

- ① 社員数の増員
- ② 就業環境の改善
- ③ 品質の確保
- ④ 業務処理の効率化
- ⑤ やりがいづくり・見える化
- ⑥ 人材育成の強化
- ⑦ チームづくり
- ⑧ 処遇の改善

## アンケート結果

### 『情熱とやりがい』創刊号を読んだ感想は？

平成25年11月調査



### 社員の主な感想

- 日常の忙しさに忘れがちなコンサルタントとしてのやりがいや、会社の魅力を理解できる冊子になっている。
- 他支店や海外勤務者など、普段接点が少ない社員の仕事内容や、前向きな姿勢が見える化できてよかった。
- 技術者個人の思いを冊子にし、全社員で共有化することは、会社やチームとしての一体感が生まれると思う。
- プロジェクト紹介が専門的で、やや難しい印象はある。反面、具体的に詳細な分、仕事の達成感や苦勞が見えるものになっている。

## Contents

### 情熱座談会

02 歴史で振り返る我が社の魅力と未来 ～半世紀以上、脈々と継承するOCスピリッツ～

### 09 私とシゴト

- 11 ①【橋梁】環日本海交流のゲートウェイ新湊大橋詳細設計【富山県】
- 12 ②【橋梁】日進ジャンクション橋梁詳細設計（愛・地球博関連業務）【愛知県】
- 13 ③【道路】軽井沢六本辻ラウンドアバウトの社会実験【長野県】
- 14 ④【保全】道路施設の維持管理計画策定業務【熊本県】
- 15 ⑤【防災】自然災害早期警報構築プロジェクト【ミャンマー国】
- 16 ⑥【エネルギー】太陽光を活用したグリーンエネルギー導入事業【グルジア国】
- 17 ⑦【港湾】シハヌークヴィル港緊急改善計画（I期）・緊急拡張計画（II期）【カンボジア国】
- 18 ⑧【総合開発】ナカラ回廊 経済開発戦略策定プロジェクト【モザンビーク国】

### 特集【東日本大震災】

19 被災地の復興に向けて ～地域の早期再生を推進する挑戦者たち～

### 25 OCの社員たち

#### 成長のキセキ

- 27 ①国内にいながら海外案件を経験
- ②発注者ニーズの理解と一歩先の提案力
- ③海外研修制度への参加が成長のきっかけ
- 28 ④国内での経験を海外で活用
- ⑤時短勤務・在宅勤務で充実の毎日
- ⑥国際協力NGOの事業統括を担当

#### チーム力向上委員会

- 29 就業環境を整備して組織を活性化  
山登りを通じて社員が仲良くなる部活動
- 30 スーパーアドミ養成講座で海外で活躍できる人材を育成  
成功に導いたSCとGCの連携と協力

### 本冊子中の略語の解説

ACKG: 純粋持ち株会社の株式会社ACKグループの略。当社はACKグループの基幹企業。  
OC : 株式会社オリエンタルコンサルタンツの略。

SC : SC事業本部を指し、主に国内業務を担当。  
GC : GC事業本部を指し、主に海外業務を担当。





社会や時代のニーズをキャッチし、事業の領域を広げながら堅実に成長  
 創立からの年表（3、4ページ）を見ると、右肩上がりの成長を続けています。入社当時のこと、その後の事業の変化についてお聞かせください。  
**渡辺** 入社した1978年当時、本四架橋や高速道路など大きな

**田中** 私は入社から、いい意味で辻さんに鍛えられました（笑）。1994年入社当時はバブル崩壊後で、会社全体としては厳しい時期でしたが、交通の仕事はどんどん増えていました。それまでは道路を「新設する」のが仕事の中心でしたが、その頃から道路を「利用する」方向にシフトしてきたのです。辻さんの論文や報告書を読むと、辻さんが作成したプログラムを改良してシミュレーションに使うとか。その後は、交通に特化した専門技術を持つグループ会社に向かい、民間相手の新事業にチャレンジしました。数多くの失敗もりましたが、1億円規模の新規受注を得た時は嬉しかったですね。それまでは公共の仕事だけであったから、民間の仕事の難しさを実感できました。また、取締役として会社経営に関わることでできたのも、大きな自信となりました。  
**猪爪** 入社6年目で東北支店にいた時に起きたのが、阪神淡路大震災。構造の仕事に携わる者として、非常に衝撃的な出来事でした。まさか高速道路の橋梁が横倒しになるなんて、想像もしませんでしたから。どうしても現場を見たい気持ちを上司に伝え、被災

なプロジェクトが動いていて、20年間くらいは道路公団や本四公団の仕事が中心でした。我が社はPC<sup>※</sup>技術のバイオニアとして高い技術力を持っているんだという意識が高く、その自覚を守るため先輩方も厳しかった。ただ下部工には強みを持つものの、吊橋や斜張橋の実績は少なく、事業領域拡大のためには、上部工の分野を強化しなければという思いはありました。当時、構造計算には導入されたものの、設計図面は手描き。そして精度の高い設計をするためには、現場の知識が必要だという考えのもと、多くの社員に施工管理の経験をさせていました。

**今野** 私は渡辺さんより5年前の1973年入社です。その頃は構造計算をするにも電電公社（電信電話公社）のソフトウェアを利用した電話回線で行っていました。初任給が7万円の時代に、四則計算しかできない電卓が2万5千円もしました。無理して自費で購入しましたが、（笑）。鉄筋の応力度計算も自分たちでプログラム作成・データ入力し、また発注者に提出する配筋図の計算は、ソロボンを使っていました。そう考えると現在は、精度の高さや時間の短

調査業務の補助のために現地入り。現場を見ることができたことは、その後に耐震基準が変わった時、お客様への提案に非常に役立ちました。そしてバブル崩壊も記憶に新しい。インフラ整備の基本方針が、経済性重視となり、コスト削減一辺倒にガラッとムードが変わりましたから。石倉さんなどは、入社後から一度も景気のいい思いをしたことがないのではありませんか（笑）。  
**石倉** 私は1997年入社ですが、大学に在学中は建設業界の景気は、まだ良かったと記憶しています。ところが入社直後に、建設業界は冬の時代を迎える（苦笑）。仕事の量は多かったです。バブル期のような大規模プロジェクトは大きく減少しました。その中でも道路公団等発注の大規模橋梁に従事できたことは、運が良かったと思います。

会社の成長は、技術力向上の先にある  
 次のステップに上がるチャンスととらえ、  
 世界に伍して戦えるコンサルタントへ

**渡辺 英夫** (わたなべ・ひでお)  
 SC事業本部 関東支店  
 道路保全部 理事  
 日本大学大学院  
 1978年入社。本四架橋・湾岸道路・首都高速などの構造や設計法の検討、沈埋トンネルの技術開発にたずさわる。その後、海外で橋梁・沈埋業務を担当。九州支店、関東支店では国交省の橋梁保全業務に従事する。



**辻 光弘** (つじ・みつひろ)  
 SC事業本部 関東支店  
 都市地域創生事業部門 交通技術部 技師長  
 神戸大学卒  
 1978年に入社し、技術開発室・総合計画部門で交通調査や研究業務を担当する。海外勤務、関西支社、現代文化研究所への出向の後、現在に至る。交通の円滑化、安全対策、管理運用などに35年間従事。

調査業務の補助のために現地入り。現場を見ることができたことは、その後に耐震基準が変わった時、お客様への提案に非常に役立ちました。そしてバブル崩壊も記憶に新しい。インフラ整備の基本方針が、経済性重視となり、コスト削減一辺倒にガラッとムードが変わりましたから。石倉さんなどは、入社後から一度も景気のいい思いをしたことがないのではありませんか（笑）。  
**石倉** 私は1997年入社ですが、大学に在学中は建設業界の景気は、まだ良かったと記憶しています。ところが入社直後に、建設業界は冬の時代を迎える（苦笑）。仕事の量は多かったです。バブル期のような大規模プロジェクトは大きく減少しました。その中でも道路公団等発注の大規模橋梁に従事できたことは、運が良かったと思います。



**田中 淳** (たなか・あつし)  
 SC事業本部 関東支店  
 都市地域創生事業部門 交通技術部長  
 日本大学卒  
 1994年入社から関東の交通を担当。2005年よりグループ会社に出向し、従来の事業の他、交通関連の新規事業を検討する。2011年より現在の立場で交通安全・交通渋滞・ITSなど交通の幅広い分野に関わる。

縮などは大きく進歩しましたが、入力と結果しか分からないデメリットも。技術者として成長するためには、結果が導かれるプロセスを理解することが大事です。だから、私は1978年入社で渡辺さんと同期です。ちょうど交通分野の創生期で、その頃は交通現象、つまり渋滞がどのように発生するか、事故がなぜ起きるのかなどをフィールド調査し、とりまどめる仕事を担当していました。交通分野が学問的に体系化されていなかったため、文献を読み現場で確かめるという時代。その後10年間、どっぶり交通流シミュレーションに取り組みました。プログラムを作り、世の中にある交通現象を精度よく再現。この経験を事故の対策、整備効果、交通マネジメント、道路管理など交通に関わる様々な分野の業務に活かすことができました。当時は大学の先生方と意見を交わすとか、学会の研究活動に参画しスキルを磨きました。委員会でも怖い先生から怒鳴られたりすることもよくありました（笑）。しかしその経験があり、鍛えられました。今でこそ若手にノウハウを伝授する立場ですが、最初は見よう見真似でしたね。

若手への技術伝承を強化するとともに  
 SCとGCの人材交流を推進し、  
 世界のトップコンサルタントを目指す

**今野 啓悟** (こんの・けいご)  
 GC事業本部 道路交通事業部  
 道路計画部 理事  
 東海大学卒  
 1973年入社後は国内で構造物の設計に従事。本四架橋（大鳴門橋・明石海峡大橋）の設計・施工管理にたずさわる。1994年からは海外業務を担当し、現在もPMとしてさまざまな国で活動している。

社会インフラ創造企業の実現に向け、  
 国内の受託業務を主導的に遂行するとともに、  
 高度な技術を海外へ展開

道路の分野において国内10数位くらいだったのが、現在ではトップクラス。技術力の高まりに比例して、会社の成長があります。

国内との連携と社員の意識改革でポテンシャルの高い海外市場を攻略  
 海外事業の変化についてお聞かせください。  
**山内** 私が初めて仕事で海外へ出たのは28歳の頃。この業界に入ってから34年間のうち、22年間は海外で過ごしました。その過半はインドネシア。今から30年前は人口が1億6千万人くらいで貧困層が非常に多く、とても発展できる状況ではありませんでした。ところが現在では25億人を超え都市部では開発が進み、留学帰りの若手ビジネスマンが地元経済を牽引するまでに成長しています。そのような中で、海外事業の変化として、特に実感することは、今世界中で起きている急速なグローバル化、ポータリティ化です。そしてITなどの技術革新により、単純な技術は海外の人材やコンピュータに置き換わっています。その変化の中でコンサルタントとして、何をしなければならぬのか問われている。専門性を高めて総合化・複合化したサービスを提供できないと仕事

※PC…Prestressed Concreteの略。あらかじめ応力を加えたコンクリート材。鉄筋コンクリートに比べて、引張力によるひび割れを防ぐことができる。



**山内 順** (やまうち・じゅん)  
GC事業本部 総合開発事業部  
副事業部長 兼 空港部長  
東海大学卒

1980年より国内では津波解析、港湾の耐震化業務を担当する。その後、ジャカルタ漁港を筆頭に海外の港湾案件に従事。港湾部長、ジャカルタ事務所長を経て、現在に至る。在外20年間の大半は家族を帯同した。

## 社員の挑戦を歓迎できる風土へ 目指すのは、総合化・複合化した事業を マネジメントできるインテグレーター

長年培ってきた、  
OCの魅力・スピリッツを伝承し、  
会社の成長を推進  
——最後に成長に向けたメッセージをお願いします。

「道路・交通」のコンサルタントという印象が拭えません。今野さんが話されたように「語学力が足りないから海外に出ない」と思うのではなく、まず国内外共に事業領域を広げていくことが、これからの課題だと思います。そして、我々コンサルタントは、将来的にはインテグレーター※としての役割を担うことになるのではないのでしょうか。

**渡辺** インテグレーターというのは、1つのキーワードかも知れませんが、今は2020年東京オリンピックの開催や震災復興がらみの国土強靱化で、建設業界は向上き傾向です。ただこれが継続する保障はない。国内ではインフラ保全や地域活性化など新たな分野も広がっており、事業経営など、新たなステージに上がるための大きなチャンスだと思います。まだ発注者依存型の仕事が多いですが、欧米の一流コンサルタントの上を行く、メイドインジャパンを付加価値とした提案力を強化したい。



**澤下 理恵** (さわした・りえ)  
GC事業本部  
総合開発事業部 建築開発部 技師  
早稲田大学大学院卒

2003年に入社。教育・保健医療・観光関連等施設の計画、施設の運用の観点から人材育成を支援する。インドネシア、コンゴ民やヨルダンなどの国々で業務実績があり、ハードソフトの両面から案件にたずさわる。

## 普段から情報のアンテナを高くし 日本の得意を活かして競争力を強め、 新規事業など業容拡大に貢献したい

——最後に成長に向けたメッセージをお願いします。

**澤下** ハードにとどまらずソフト、ODAにとどまらず民間分野への受注を増やせるよう努力し、常に事業領域拡大に貢献したいです。

**石倉** 構造系は既往業務での成功経験が大きく、意識改革が遅れている部門だと感じています。我が社の方向性に部下を導き、主導型ビジネスに移行することが自分の役割だと考えています。

**田中** ひと言で言うとう海外事業の強化です。社内でも海外プロジェクトに手を挙げる人材がまだ少ないので、なぜそれが必要かを伝えていきたい。海外を目指す人が増えることが、社会インフラ創造企業への一歩だと思います。

**猪爪** 構造の技術を活かし、何か新しいことにチャレンジしたいですね。もっと自由に動いて、社内外のリソースと協力し自分の好きなことを仕事にすることが、結果として会社の成長につながると考えます。

**山内** コンサルタントという仕事は社会的立場の高い仕事。一度きりの人生なので自分の可能性を閉ざさず、社会利益を追求する仕事をすれば、自分も会社も成長できると信じています。

**辻** 自分の年齢になっても、新しいことや先進的なことに会おうと

——本日はありがとうございました。

ワクワクします。達成感を仲間と共有できる社風でありたいと思います。ある先輩に聞いた話ですが、情報という字は「情に報いる」と書きます。自分の情報をもっと周りに発信し、周りの情報をいかに吸収できるか。その結果、情があり、人に報いる組織になると思いますね。

**渡辺** 世界に伍して戦える会社にするために、常に一段高い所を見ます。我が社は1000名規模の会社になりました。委縮せず堂々と行動していきましょう。

**今野** 私が初めて海外で仕事をしたのは44歳の時。50歳を前にして初めてプロジェクトマネージャーとして仕事をしました。だから、新しいことに挑戦するのに遅過ぎることなど決してありません。中国や韓国、東南アジアは日本に追いつけ、追い越せという勢いで積極的に活動しています。また欧米には一流のコンサルタントがひしめいています。社員一人ひとりが本気で努力すれば、世界に伍して戦うことは十分可能だと思います。長年の経験や、OC社員としての誇り、精神を若手に伝承し、成長を推進していきたいですね。

※インテグレーター…顧客の状況やニーズを把握し、個々の要素技術を高度化・総合化することで付加価値・サービスを提供する者。

がなくなる時代は、すぐそこまで来ています。

**澤下** 建築開発部に所属し、2003年から海外で仕事をしています。その頃はハードが中心でした。建屋、つまりハコモノを造るまでの案件が多かったと思います。ところが最近では建物を造るだけでなく、その後の維持管理等ソフト分野のニーズが高まっています。5S活動※のように、日本が得意とする人材の研修なども含めた管理・運営の提案を海外で普及させています。

**今野** 海外のプロジェクトも近年、ニーズが大きく変化しています。実はこの座談会の後、プータンに行くのですが、ここは平地がほとんどない山岳国。だから、先進的な技術が必要とされます。私がPMとして担当するのですが、本件では河川改修の要望が政府とJICAから要求されていて、適任者がGCにはいなかった。そこでSC関西支店から適任者をアサインしました。ここでのポイントが、英語がしゃべれなくてもいいから、高度な河川管理の技術を持つ人を寄越してほしいという点。経済的妥当性を見据え、維持管理も含めた構造物の検討ができる技

## 常に事業のヒントを求める姿勢を持ち インフラ構築という概念にとらわれず、 広い視野で技術の横展開を強化



**猪爪 一良** (いのづめ・かずよし)  
SC事業本部 関東支店  
保全防災事業部門 道路保全部長  
東京都立大学卒

1989年入社。東北・関東・中部の各支店トバイ本社で業務を歴任。2012年より関東支店の道路保全部長として道路の維持管理や防災に従事する。インフラ保全・事業運営の重点化事業を責任者補佐として推進する。

術者はまだ少ないため、ここには日本の培ってきた技術の出番が存在します。英語は二の次でいいから、手を挙げるのが大切なのです。河川の管理なら誰々、防災の最新技術は誰々という風に、技術者として目の前の仕事以外にも関心がないといけない。情報交換や意見を戦わせる場を共有していかないと、世界から取り残されると思います。

**山内** SC・GCという枠組みにとらわれず、全社員が海外を視野に入れるべきでしょう。会社に頼るのでなく、個々人が自らの可能性を広げることが重要。特に若手は最初から完璧なものを求める必要はなく、失敗してもいいから挑戦すべきだと思います。私と猪爪さんが関わっている中小企業支援でも、本邦技術を主導的に海外展開しようとしています。私の担当する中小企業など、社員はたった4名です。そんな小さな会社でも、海外へ活路を見出そうと挑戦しています。我々にできないわけがありません。

築き上げた要素技術と組織力で  
真の総合コンサルタントへ  
——2020年ビジョン「社会インフラ創造企業」の実現に向け

## 専門性を高めると同時に、 主導型ビジネスへ移行するため 周りの仕事への理解を深めたい



**石倉 昇** (いしくら・のぼる)  
SC事業本部 九州支店  
技術部 次長  
日本大学卒

1997年の入社後は関東支店に所属し、主に橋梁下部工およびコンクリート橋の設計を担当する。2003年より九州支店に配属となり、詳細・予備設計や耐震・補修設計など橋梁関連の幅広い業務にたずさわっている。

で、今後の課題は何でしょうか。

**石倉** 私は、経験の少ない若手の頃から、一人で発注者と協議するなど自らの責任でプロジェクトを遂行してきました。こうした機会は、自己成長するよい環境でした。1人ひとりの自律は、キーワードだと思います。

**田中** 行政からの受託業務についても、主導的に業務を進めることができて真の総合コンサルタントになれるのだと思います。海外も含め主導的な提案、事業経営の実践が今後の戦略です。我が社でも一部その成果が見えつつありますが、まだまだ少ないのが現状です。

**澤下** コンサルタントとして、もっと技術競争力をつける必要があります。国内の同業他社だけでなく、今後は海外の一流企業と伍していかねばなりません。技術力をこれまで以上に磨き、自分のアンテナを高くして担当分野を広げていく努力が必要です。

**山内** 外部、特に海外から見るとまだ我が社は「総合」ではなく

※5S…整理、整頓、清掃、清潔、躰けのこと。職場環境の美化だけでなく、従業員のモラル向上などの効果が期待される。

※事業経営…自ら投資し、事業主体としてインフラビジネスを展開すること。



Project Story

# 私とシゴト

国内・海外で活躍するコンサルタントには、それぞれプロジェクトの中で達成感を感じた瞬間があります。ここでは8のプロジェクト・ストーリーを紹介し、社員の“情熱”と仕事の“やりがい”に迫ります。

- 1 【橋梁】環日本海交流のゲートウェイ新湊大橋詳細設計【富山県】 11p
- 2 【橋梁】日進ジャンクション橋梁詳細設計(愛・地球博関連業務)【愛知県】 12p
- 3 【道路】軽井沢六本辻ラウンドアバウトの社会実験【長野県】 13p
- 4 【保全】道路施設の維持管理計画策定業務【熊本県】 14p
- 5 【防災】自然災害早期警報構築プロジェクト【ミャンマー国】 15p
- 6 【エネルギー】太陽光を活用したクリーンエネルギー導入事業【グルジア国】 16p
- 7 【港湾】シハヌークヴィル港緊急改善計画(I期)・緊急拡張計画(II期)【カンボジア国】 17p
- 8 【総合開発】ナカラ回廊 経済開発戦略策定プロジェクト【モザンビーク国】 18p



1 橋梁

環日本海交流のゲートウェイ新湊大橋詳細設計【富山県】

# 入社当時からの夢だった斜張橋の設計に初挑戦。 現在の夢は、橋のドクター」と呼ばれる技術者。

富山新港に日本海最大の複合斜張橋として完成した。臨港道路の主橋梁（土木学会田中賞受賞）。

富山新港の東西の交通手段は、県営の渡



船しかなく、国道415号は大きく迂回しており、地域分断と物流の円滑化の課題があった。これらの課題と、新たな観光資源とすべく、臨港道路を建設するプロジェクトがスタートした。

「新湊大橋は、臨港道路の主橋梁。橋長600m、中央径間360mを有する日本海最大の複合斜張橋です。ケーブルと主塔は直線的に美しい外観とし、環日本海の交流のゲートウェイをイメージさせる景観的に優れた橋梁です」

そう語る松金にとってこの設計は非常に思い入れがあった。大学時代に横浜ベイブリッジを初めて見て以来、斜張橋の設計をずっと夢見ていたからだ。

「本橋の特徴である鋼とコンクリートの接合部の設計は、解析を駆使して応力の伝達を把握し設計を行いました。大規模地震に対応し、コンクリート桁に高強度鉄筋の採用を提案し、スレンダーな桁とすることができました」

このプロジェクトは、当時としてはめずらしく、1橋をOCを含め3社で設計。工程管理、情報共有の面で苦労したものの、数多くの技術者と交流が図れ、技術のノウハウを吸収することができたことは収穫だった。

**構造・景観チームの連携によるゲート性を確保した橋梁デザインの実現、OCの総合力。**

構造上の課題解決に加え、大学の先生も参画した景観検討委員会もあり、桁の形状は議論を重ねた。

「橋梁は、地域の利便性向上だけでなく、地域住民に愛されるシンボルとなります。経済性、施工性、将来の維持管理を考慮するのはもちろんですが、桁のデザインは、構造的な景観性などさまざまな角度から検討しました。苦労した分、現場で施工が進み図面通りに完成した新湊大橋を見た時は興奮しましたね（笑）。息子と夏休みに橋を渡ることが今の楽しみです」

橋の景観はOCの別チームが担当したため、社内で激しい議論をすることもあった。



古き良き伝統を踏まえ、21世紀の環日本海地域の新たな象徴、交流と安らぎの場を創出することをコンセプトに、地域をつなぎ、増大する港湾物流の円滑化、さらには新たな観光資源とすべく建設された。

その甲斐あって、OCの構造、景観チームで推奨した案が最終案となったという。「初めて斜張橋に携わり、当初はわからないことだらけでした。社内外のネットワークを活かし、課題を一つずつ解決しました。一人の技術者ができることは限られているため、人脈づくりの重要性を改めて認識しました。時代の変化とともに、橋梁などの構造物は新設から維持管理の時代に入っています。今後は、経験と課題解決するマネジメント力を活かし、橋梁のドクター」と呼ばれる技術者になりたいです」

夢は思い続けられ叶うと言う、松金の信条は、目の前の仕事に全力投球すること。新たな目標に向かって歩んでいる。

**松金 伸**  
(まつがねしん)  
SC事業本部 関東支店  
国土整備事業部門 副部門長  
芝浦工業大学卒

入社から現在までほぼ一貫して、橋梁など構造物を主体とした調査・計画・設計・解析・検討に従事する。30代の前半には、旧道路公園に約3年間出向し、施工監理員として業務に取り組んだ経験を持つ。



OCが設計を担当した、日進ジャンクションBランプ橋（PC箱桁橋）の完成写真。日進ジャンクションを含む、名古屋瀬戸道路全体の建設の執筆者、取りまとめも実施。

2 橋梁  
日進ジャンクション橋梁詳細設計（愛地球博関連業務）【愛知県】

# 世界が注目した愛知万博をインフラ整備の面で 成功に導いた実績は、コンサルタントとしての誇り。

技術と営業がコラボして主導的に動き、愛知万博関連の業務を数多く受注。

愛・地球博に合わせて開港した中部国際空港、セントレアライン、新交通リモノなど、万博関連の事業を幅広く手がけてきた中部支店。安藤が中心となって担当したのは、東名高速道路と接続する名古屋瀬戸道路日進ジャンクションのプロジェクトだ。Bランプにおける連続高架橋5橋は、詳細設計だけで2億円を超える大規模受注となった。

「現SC事業本部長の青木さんを中心に、技術員と営業員が協働し、発注者の愛知県に対して事前に多くの提案を行いました。技術と営業がコラボして主導的に提案してきたことが、大規模案件の受注につながったと思います」

たかさんの詳細設計業務が発生するなか、当社を含め5社で仕事を分担。もともと予備設計を担当していたOCが幹事会社となり、取りまとめることとなった。「短期間に大量の設計をしなければなら

ず、発注者や他社とで効率的に業務を進める必要があったため、情報共有の時間を調整しました。万博会場は市街地から遠く、お客様はバスで移動します。名古屋瀬戸道路を利用することで動線はほぼ計画通り円滑となり、大渋滞になることもありませんでした」

万博の開催日程は決まっているため、設計・施工は時間との戦いだった。設計が終わると同時に施工管理へと、息つく暇もなかったが納期に間に合わせる事ができた。

**予備・詳細設計から施工管理まで担当し、橋脚間101mの橋をたった一晩で架橋。**  
曲線の橋梁となるジャンクションは、構造上簡単ではない。しかも、東名高速道路における大事なジャンクションであり、安全性はもちろん、利用者にとって使い勝手も重要だ。

「当初は盛土で計画していましたが、大量の土の手配という課題がありました。コスト、安全性、納期などあらゆる面から検討



左から) 林克弘、高瀬弘、増淵秀司、安藤誠、長屋定政、洞庭敏昭

まず、連続高架橋に決定しました。施工管理でも大変苦労しました。橋脚間101mの橋を東名高速道路の上に架けるのですが、通常の工法ではとても無理。そのため東名の道路上で、大型自走式台車を用いて桁をひきだすという工法を提案しました。これまで同様の架設例がなく、工事が完了した時には感無量でしたね」

日進ジャンクションの工事がほぼ完成した頃、地元住民を対象として、高架橋上をウォーキングするイベントが開催された。その中に、家族と一緒に参加する安藤の姿があった。

「当時、2人の子供は4歳と2歳。お父さんが造った橋だと言ってはしゃいでいた記憶があります。その子供たちも成長しましたが、あの場所を通るたびに思い出してくれているようです」

コンサルタントは社会への貢献度が高く、やりがいのある仕事だと安藤は断言する。その視線は、次のプロジェクトを見据えていた。

**安藤 誠**  
(あんどうまこと)  
SC事業本部 中部支店  
技術部 構造グループ  
担当次長  
名城大学卒

入社後は関東支店にて橋梁・共同溝などの計画・設計に従事、平成6年より中部支店へ。橋梁・地下構造物の計画や設計を担当する。平成18年より主に橋梁の点検・補強・補修設計など保全業務を行っている。

3 道路

軽井沢六本辻ラウンドアバウトの社会実験「長野県」

# 国内ではめずらしいラウンドアバウト（環状交差点）運用までの苦難は、技術者としての成長の糧に。

六本辻交差点の安全性向上のため、ラウンドアバウトの導入を検討。

軽井沢の六本辻交差点は6本の町道が接続するラウンドアバウト（環状交差点）。通学路として学童が利用し、他地域からの観光客も多く出会う頭の事故や、利用者の乱横断など危険性が指摘されてきた。信号機の制御の対応は困難な状況にあり、国内では実績の少ないラウンドアバウトの構造が検討された。

「2012年に社会実験として採択。すぐに運用を開始し、GWや夏休みなど観光客が訪れるピークとなる避暑の繁忙期を含め、課題点の解決策を検討し、改良と検証を繰り返した上で、継続的な運用が決定しました。全国に円形交差点は約100ヶ所。その中でラウンドアバウトはわずか10ヶ所程度です。実績が少なく、明確な設計基準もありません。また交差点の課題は地域特性により大きく異なります。学識経験者や警察の方に意見を求め、協議しながら

進めていきました」  
中嶋にとって、ラウンドアバウトは初めての体験だった。苦勞や困難はなかったのだろうか。

「国内では新しい構造のため、工夫して何度も実験をくり返しました。車が走行すべきでない場所をカラー舗装したり、交差点に流入する前に注意喚起を促すサインを造ったり。自動車・自転車・歩行者というさまざまな視点から検討し、交通工字の知見が深まりました」

実験前に比べ走行車両は減速して還道へ流入し、乱横断者数は減ることから、安全性の向上が確認された。実験はひとまず成功となる。

国内で得た技術や経験で、開発途上国の課題を解決したい。

2013年の夏、中嶋の姿はラオスにあった。GC事業本部のプロジェクトに同行したのだ。

「以前から『海外に行きたい！』と言い続

けていたら、声をかけてくださって（笑）。ミンマー・タイ・ラオス・ベトナムを横断する東西経済回廊の改良事業に約2週間携わり、海外に貢献する意欲が高まりました。

国内需要は今後厳しいと予想されるため、国内の技術者も

海外を視野に入れるべきだと思います。設計や施工管理の経験を活かしつつ、新しい技術を取り入れ、国内外を問わず、社会に貢献したいですね」

国内・海外という枠組みを超えたコンサルタントになる。そんな中嶋の挑戦が始まったのだ。



中嶋 一雄  
(なかじま・かずお)  
SC事業本部 関東支店  
都市地域創生事業部門  
道路技術部長  
国土建設学院卒

前職ではコンサルタントとして設計や道路の施工管理に携わる。OC入社後も一貫して、高速道路・一般道路・交差点などの設計を担当。今回のラウンドアバウトは初めての挑戦となった。



軽井沢町六本辻は、6枝の無信号交差点をラウンドアバウト運用に改良。ラウンドアバウトにしたことにより、自動車走行の円滑性と、歩行者、自転車の安全性が高まった。

4 保全

道路施設の維持管理計画策定業務「熊本県」

# OCが保有する先端技術とノウハウを結集し、インフラ保全分野で攻めの営業を展開。

アセットマネジメントの有効性を伝え、市町村の効率的な道路保全をサポート。

国や県では徐々に、アセットマネジメントという考え方が広まりつつある。しかし、市町村ではまだ十分に浸透していない。九州支店では、市町村の道路施設における維持管理計画の策定業務を提案し続けてきた。

「ある政令指定都市では、道路に穴が開くなど破損したら補修するという事後対応が常識でした。今後インフラの長寿命化を視野に、予防保全という観点から道路を維持管理していきましょうと提案。担当者レベルでは関心を示してくれたものの、技術・コスト面でその有効性に懐疑的な方もいました。そこで市の土木部長をはじめ担当部署の方々に参加していただき、市役所の中で勉強会を実施。何度かのやり取りの後、予算化していただくことができました」  
道路施設の維持管理といっても、その範囲は橋梁、舗装、照明灯などさまざま。



また、市町村が管轄する道路も幹線道路から生活道路まで幅広い。

「幹線道路は交通量などの計測により、劣

化の予測がしやすいのですが、生活道路の場合は予測しにくい。災害などとは関係なく、劣化を予測して維持管理の計画を立てる必要があります」  
以前いた会社では、橋梁の施工を担当していた吉永。過去に培った技術が、今の仕事に活かされていると言う。

インフラ保全・運営管理を推進するため、技術を共有してOCの強みを発揮。

熊本エリアを担当するようになった頃は、国や県の業務がほとんど。そのため市町村には人脈がなかった。

「市の担当者と一緒に、予算取りのための資料を作成したりするうちに、次第に仲良くなることも多く……。担当者から徐々に信頼を得て、道路以外の分野の相談を受け発注いただいたこともあります。最近では、担当以外の知識も必要だと実感しています。正直言うとこれまで九州支店では、技術・ノウハウの共有が十分できていませんでした。そこで体制を大きく変え、全体ミ



社会資本の老朽化が進む中で、戦略的な維持管理・更新を推進することが必要となっており、「国民の命を守る」観点からもインフラ保全は急務の課題となっている。

ーケティングなど情報共有の時間を増やすようにしています」  
施工会社にいた吉永だからこそ分かる、OCの魅力とは一体何だろうか。

「全国展開している総合コンサルというのは、営業をする上で大きな強み。支店内で閉じこもっているのでは、OCの強みが発揮できない。私が担当するインフラ保全では、舗装点検支援システムなど他支店のノウハウや実績を活用する必要があります。会社が推進する重点化事業の成功には、全社的な協力・支援が欠かせません」  
個人の裁量で自由な活動が認められているのが、OCの社風だと吉永は言う。今も攻めの姿勢で業務に取り組んでいる。

吉永 亨  
(よしなが・とほる)  
SC事業本部 九州支店  
事業企画部 主任  
九州東海大学卒

大学を卒業後、橋梁を中心とした施工会社に勤務。OCに入社後は、九州支店に配属される。現在は事業企画部の一員として、熊本県・鹿児島県を担当している。



# 学生からの希望であった防災分野の仕事ができ、充実の日々。世界中の意欲的・情熱的な人々とふれあい、自らも成長。

40度以上の気温、月に数千キロの移動…。  
厳しい環境下、課題解決へのアプローチ。

2008年5月、ミャンマー南部のエーヤワディ川デルタに上陸したサイクロン「ナルギス」。同国史上最大の自然災害は、13万8千人もの死者・行方不明者を出す未曾有の人的被害をもたらした。同年8月に実施されたプロジェクト形成調査によると、被害がここまで拡大した原因として、情報伝達システムの不備が指摘。気象情報が中央政府・州・都レベルには伝わっていたものの、町や村という単位まで十分に周知されていなかったのだ。自然災害早期警報システムの一刻も早い整備を目的として、プロジェクトがスタートした。

「コミュニティ防災の担当者として、災害の文献調査や村落部での現地調査を実施。調査・業務対象地が多岐にわたり、気温40度以上の猛暑の中、月に数千キロも移動するなど体力勝負の面も（苦笑）。貧困地域のためインフラが未整備で、防災に至る前

段階での課題がとにかく多かった」。サイクロンや津波など、自然災害はいつ起こるか分からない。そのため早期の対策が望まれた。コミュニティ防災を担当する太田は現在、試験的にパイロットの村を選定し、防災活動の技術移転を行っている。

「コンサルとしてまだ駆け出しなので、まずは一つひとつ実績を作りたい。その上で今後は、プロジェクトの案件形成業務に携わりたいと思います。対象国の地域住民の「生」の意見を伺い、現地にとって真に役立つプロジェクトを形成できればと考えています。努力する人や成長したい人が公平に機会を得て、正当に評価される世界を作る手助けをするのがコンサルの仕事。意欲や情熱を持つ世界中のエネルギーシユな人々と切磋琢磨し、お互いに成長できればと思います」



寝ても覚めても仕事のことか頭を離れない、という太田。彼女自身の瞳も、まさに意欲と情熱に輝いていた。

**太田 陽子**  
(おおた ようこ)  
GC事業本部 プランニング事業部  
都市地域開発部  
防災・観光開発グループ 技師  
北海道大学 /  
ピッツバーグ大学  
国際公共政策大学院  
在学中、国連のバンコク事務所  
でインターンシップを経験し、  
2007年に入社。現在はインドネ  
シアとミャンマーにおいて、技  
術協力プロジェクトでコミュニ  
ティ防災の業務に従事する。

## 6 エネルギー

太陽光を活用したクリーンエネルギー導入事業「グルジア国」

# 海外案件を手がけるコンサルタントの仕事は、「技術外交官」。



グルジアは、黒海の東岸に面し、需要電力の約90%を再生可能エネルギーで賄う環境に優しい国。経済成長と温室効果ガスの排出削減の両立をめざし、日本の環境技術力が求められている。

政府や他国の運営委託会社などとの度重なる交渉により、利害関係を調整。

世界数十ヶ国に太陽光発電システムを提供するという、外務省による無償プロジェクト。その対象国の一つであるグルジアの事業をOCが受注した。エネルギー、環境、建築、電気など9名の技術者を中心に、計画・設計から入札補助・施工監理までを、ワンストップでOCが担当すること



「グルジアは90%以上を再生可能エネルギーで賄う国。そのほとんどが水力です。今後も化石燃料や原子力に頼ることなく、環境に優しい国というコンセプトを継続したいものの、水力発電は場所が限定されま

「お互いに納得して契約にサインしたのに、次回会った時には意見が変わっているとか…（苦笑）。しかし契約だからと頭ごなしに押しつけるのではなく、粘り強く説得し、お互いの溝を埋めていくのもコンサ

ルの仕事です。本件では政府だけでなく、空港をBOT※で委託された他国の運営会社との交渉も必要でした。メンテナンスやトラブルが増えるのは面倒だ、と反対されたわけ。その説得には、運営会社のメ

世界中で確実に高まるニーズをどう捉え、スマートコミュニティ事業を推進したい。

現在、加藤が特に力を入れているテーマがある。それはスマートコミュニティだ。「経済成長が著しい世界の国々では、エネルギー需要がますます高まっています。しかし資源は限られており、かつて日本が経験し克服してきた公害など環境問題もあり

ます。ここでは、今まさに日本の技術力が求められていて、需要と供給が最もマッチしている分野の一つです。これまでOCでは、単独分野での事業が多かったと思いますが、しかし今後はIT活用による情報の共有化など、事業と事業を結ぶ複合的な提案をしていかねばなりません。スマートコミュニティは、環境・エネルギー・交通・通信などさまざまなインフラ技術が求められます。そのため、これまで以上に幅広い知見が必要になると思います」

海外を担当するコンサルの仕事は、技術外交官。プロジェクトを通じて、世界の国々と日本の友好関係の構築に貢献したいと語る加藤。その視線は次の目標を見据えている。

**加藤 宏承**  
(かとうひろつぐ)  
GC事業本部  
プランニング事業部 交通計画部  
ICT・スマートコミュニティグループ  
次長  
日本大学大学院  
入社後、建築・開発部を経てICTグループへ。ICTおよび再生エネルギーに関する業務を担当する。現在は、建築・ICT・再生エネルギーの幅広い知見を活かし、スマートコミュニティ分野に取り組んでいる。

※BOT…Build, Operate and Transferの略。民間企業が国に土地を提供してもらい、自らの資金で施設を建設し、一定期間運営・管理して投資を回収後、所有権を国へ移転する開発方式。



コートジボワール中部の市役所前で地元の子供たちに取り囲まれたときの一枚。

道路整備の単独事業から提案をし続け、地域総合開発計画の策定へと拡大。2009年以降、道路整備プロジェクトを通じた「ナカラ回廊」地域での経験をもとに、「地域総合開発計画」策定の必要性を訴求し続けてきた。同地域で採掘がスタートした石炭の重要性が日本でも認知され、日本の新成長戦略の対象として注目を浴びるようになる。その結果、地域総合開発戦略のプロジェクトが2012年に開始された。

「この地域は日本の国土よりも大きく、インフラ・産業・社会などテーマが多岐にわたるのが課題でした。将来を見据えた計画をどうまとめるか。現実とのギャップをどうやって埋めていくか。日本人38名のメンバーをまとめる総括として課題の優先度を整理し、議論しながら方針をまとめる役割を担いました」

大所帯、しかも多数の専門家をまとめることに不安はなかったのか。「上から目線のきちんとしたマネジメントは得意じゃない(苦笑)。OC社員2名を含め合計3名の副総括を選抜しました。業務を分担し、私は全体をゆるく束ねる感じ。間違いが起きていないか把握し、ミスや問題が発覚した時、お客様に報告に行くのが私の役目。あるいはリーダー同士で頼みにくいことを、私から頼んであげるとか。大きな案件では初めて一緒に仕事をすメンバも多かったため、情報共有などコミニケーションは非常に重要です」

謙遜気味に語る佐々木だが、港湾・鉄道・エネルギーなど幅広い案件の受注実績を見る「プロジェクトを通じて『モザンビークなら」と、そのリーダーシップが垣間見える。モザンビーク、ガーナ、コートジボワール。ポテンシャルの高いアフリカ地域に注力。佐々木が、初めてアフリカの国々と関わるようになった契機となるプロジェクトだった。その後はモザンビークだけでなく、ガーナやコートジボワールへと拡大する。「プロジェクトを通じて『モザンビークなら



2013年3月に開催されたナカラ回廊第1回国際セミナーの様子。

# 幅広い分野から専門家集団を構成し、総合計画に挑む。『モザンビークならOC』という信頼と評価を獲得。

## 8 総合開発 ナカラ回廊 経済開発戦略策定プロジェクト「モザンビーク国」

佐々木 英之 (ささき ひでゆき) GC事業本部 プランニング事業部 都市地域開発部 都市地域計画グループ長 東京大学大学院 都市地域計画グループで、総合計画・平和構築・復興支援などに携わる。この5年ほどはアフリカ各国において都市計画・地域開発計画・ガバナンス改善など、幅広い業務を担当している。

OC」という信頼と評価を勝ち取りました。しかしアフリカにはまだ、開発が必要な数多くの国々があります。ガーナのクマシでは18名のチームをまとめる総括として、都市圏総合開発計画に携わりました。安倍首相の訪問で今後の支援が約束されたコートジボワールでは、人材育成プロジェクトが推進されています。いまだ成長の可能性が高いアフリカで事業を拡大し、地域の経済発展に貢献したいですね」



ガーナ国クマシには伝統的な支配者であるアジャンテ王がいる。アジャンテ王へ策定中の計画の説明を兼ねて表敬訪問を実施。クマシ都市圏の将来ビジョンについて意見交換をした。



カンボジア初の日本政府による有償案件。増え続ける貨物に対応可能な港湾を計画。カンボジアの国際港・シハヌークヴィル

港では、貨物量の急増により港湾の整備が急務だった。当時の貨物量は現在の1/10程度。貨物には一般貨物、コンテナ、バルク\*がある。その頃は一般貨物が最も多かったが、今後の世界の潮流を考慮し、コンテナヤードの拡張を優先したマスタープランが策定された。「緊急改善計画(Ⅰ期)はカンボジア初の、日本政府による有償資金協力。この計画を実施中、さらに貨物量が増え緊急拡張計画(Ⅱ期)が決定しました。2007年にこれらすべての工事が完了するまで、約10年間というプロジェクト。岸壁やヤードの整備、クレーンなど荷役機械の導入を含むコンテナターミナルの建設、そして年間25万個のコンテナを扱うためのコンピュータシステム導入まで、業務は多岐にわたりました」

とにかく業務範囲が広く大変だったが、達成感が得られたと語る並木。Ⅰ期工事では現地の工事責任者、Ⅱ期工事ではPMを担当した。「緊急改善計画(Ⅰ期)はカンボジア初の、日本政府による有償資金協力。この計画を実施中、さらに貨物量が増え緊急拡張計画(Ⅱ期)が決定しました。2007年にこれらすべての工事が完了するまで、約10年間というプロジェクト。岸壁やヤードの整備、クレーンなど荷役機械の導入を含むコンテナターミナルの建設、そして年間25万個のコンテナを扱うためのコンピュータシステム導入まで、業務は多岐にわたりました」

物流・会計システムの連動が難航するも、追加費用を最小限に抑える提案で解決。工事期間中は、決して順風満帆ではなかった。なかでもコンピュータ導入に際し、会計システムとの連動を図るのは困難を極めた。「コンテナの物流を効率化するためシステムを導入したのですが、別途導入が進められていた会計システムとの連動が要求されました。客先が希望する追加機能の導入に際し、システムの委託業者との間で何度も手戻りが発生。客先からの要求と、業者からの追加費用の要請など調整にかなり難航しました。最終的には会計システムの再改造ではなく、既存および新規システムのデータ交換により追加費用を最小限に抑え、双方の合意を得て解決しました。この経験から、客先の細かな要求をしつかりと確認し、情報処理の専門家と十分に協議する必要性を改めて実感しました」

# 岸壁やヤード整備から管理システム導入まで、港湾全体のプロジェクトを10年がかりで推進。

## 7 港湾 シハヌークヴィル港緊急改善計画(Ⅰ期)緊急拡張計画(Ⅱ期)「カンボジア国」



2002年~2005年に実施したPhase 1事業の完成写真。

\*バルク…穀物、石炭、肥料などのバラ積み貨物のこと。

特集 東日本大震災

# 被災地の復興に向けて

～地域の早期再生を推進する挑戦者たち～

東北地方に甚大な被害を及ぼした東日本大震災から、3年以上が経過しました。復興のゴールはまだ見えないものの、三陸鉄道の全線開通や、三陸沿岸道路の工事も着々と進められるなど、随所に復興の兆しが見えつつあります。我が社では震災直後からいち早く調査に乗り出し、国や自治体、協力会社との連携を推進し、幅広い復興関連業務に関わるとともに、全国各地の防災関連業務の一翼を担ってきました。業務に関わってきた社員のお話を伺い、震災からの約3年間をふり返るとともに、復興や次の災害に向けた我が社の取り組みについてレポートします。



右) 陸前高田市の高台を造成するため、山の土を切り出してベルトコンベアで運ぶ。  
左上) 震災直後の名取市。  
左下) 震災直後の石巻港。船が岸壁に座礁している。

## 震災直後の調査と緊急復旧対応

緊急点検から災害査定、復旧に向けた設計へと  
かつてない業務量を短期間でこなした貴重な経験。



奥(左から)大江 龍二、伊藤 竜一、荒閑 正二、熊坂 徹也 手前(左から)木村 重喜、江藤 和昭、古賀 秀幸

### 震災直後の緊急対応のため 全社総動員により業務を遂行

震災当日、東北支店の社員は仙台市や被害の大きい宮古市で被災した。まず頭をよ、

点検・調査・設計・施工に集中して関わり、若手が大きく成長した密度の濃い2年間。

震災から数日後、特に津波被害の大きかった地域の現場を中心に調査が始まった。もともと災害査定の経験に乏しかったため、苦労も多かった。また復旧・復興に迅速な対応が求められた。点検・調査・設計など、上流工程を担当するコンサルタントに大きな負担のしかかる。

「発注者からの『できるか?』にNOとは言わないようにしてきました。東北支店だけでは対応が困難でも全社一丸となれば、解決できると信じていましたから。その対応が信頼につながり、その後の発注につながったと思います」(熊坂)

「被害の大きかった石巻港では漁船や貨物船が座礁し、船体がビルに突き刺さっており、とてもこの世のものとは思えない光景でした。離島の調査をするにも9割以上の船が流されていて、船の手配にも苦労しました。震災当時、東北支店の河川担当は私1人でしたから、他支店からの応援は本当に心強かったですね」(伊藤)

「大きな災害の現場調査、緊急対応、被災設計など短期間に集中して数多くの業務に対応できたことは、大きな自信につながりました。若手社員がその経験を論文に書くなど、成長へのきっかけになったと思います」(古賀)

「備えていないことには対応できないというところを、改めて理解しました。仕事をすすめるには電気、移動には燃料、もちろん水や

ぎったのは社員や家族の安全だった。その後かつてない津波被害の状況を知り愕然とする。

「揺れを感じた時、ちょうど東北大学の先生と耐震設計の話をしていました。道路や橋梁の耐震補強には大丈夫だと確信していましたが、実際に揺れによる被害はほとんどありませんでした。ところがその日の帰宅途中、『荒浜に数百名の死体が上がっている』というニュースを聞き、何が起ったのか分からず混乱しました。その原因が津波だったのです」(荒閑)

「阪神淡路大震災で被災しているのに、心配だったのが火災などの二次災害。緊急調査や災害査定、いつまでに資料を提出しなければならぬという期限の中で、次から次へと出される業務をひたすらこなす毎日でした」(木村)

「出先から会社に戻ると、避難所で社員の無事を確認したのですが、それからが大変。自社ビルの外階段が傾いていて、オフィスが使えない状況ではありませんでした。雪が降りしきるなか、社員は当日帰宅せずに、会社前の道路の交通規制・車線規制など歩行者の安全を守るために尽力しました」(大江)

食料も必要です。今後はBCP※の観点からも、災害への準備を徹底しないといけない。サーバに保管している重要データをクラウド化するなど、全社で備えることが大切だと感じます」(江藤)

東北支店では今回の震災対応の記録を整理し、全社で活用できるマニュアルを作成中だ。今後各地での災害時に活用することが期待されている。



緊急復旧対応に携わったメンバー。左から伊藤 竜一、三谷 祐一郎、小住 友哉、和田 廣人、古賀 秀幸、宮内 健

### 古賀 秀幸

(こがひでゆき)  
SC事業本部 東北支店  
技術部 主監  
宮崎大学卒

東北支店配属の後、関東支店を経て再度2009年に東北支店へ。これまで2度の中越沖地震、岩手内陸沖地震、東日本大震災に関わる。現在は技術部で橋梁の点検、耐震補強・補修業務に管理技術者として従事する。

### 伊藤 竜一

(いとうりゅういち)  
SC事業本部 東北支店  
技術部 担当次長  
東北学院大学卒

入社後、東北支店技術部に配属される。主に砂防を中心に、河川分野の災害対策施設の計画および設計に従事している。震災当時、東北支店でただ一人の河川・港湾関係の技術者として、震災復興でも幅広い業務を担当。

※BCP…Business Continuity Planの略。災害や事故などのリスクが生じたときに重要業務が中断しないための計画のこと。

「業務量も多くスピードが優先されたた  
最大13名のメンバーが現地に駐在した。  
基本設計の業務は大船渡市に拠点を置き、  
今後は地域活性化など街の再生を提案。  
ハードからソフトへ我が社の強みを発揮し

「業務量も多くスピードが優先されたた  
最大13名のメンバーが現地に駐在した。  
基本設計の業務は大船渡市に拠点を置き、  
今後は地域活性化など街の再生を提案。  
ハードからソフトへ我が社の強みを発揮し

「業務量も多くスピードが優先されたた  
最大13名のメンバーが現地に駐在した。  
基本設計の業務は大船渡市に拠点を置き、  
今後は地域活性化など街の再生を提案。  
ハードからソフトへ我が社の強みを発揮し



設計主任の島田 智浩。CMRのメンバーとして調査・測量・設計などのマネジメントを行う。

精度の高い基本設計が求められました」  
（斉藤）  
「2014年2月に区画整理事業の認可が  
下り、いよいよ本格的な施工がスタートし  
ました。CMRは工事施工をゼネコン3社  
が担当し、調査・測量・設計をOC含め2  
社が担当します。今回は工事が主体のため  
事業規模は、工事施工が255億円に対し  
て設計関連は3億円です。これまでとの大  
きな違いは、発注者の立場だということ。  
スケジューリングや品質管理など上位の観点  
が必要です。段取りを間違えると工期全体に  
影響するた  
め、非常に  
責任が重  
い。ただし  
2017年  
までの契約  
なので、事  
業として先々の受注が見込める利点も。ま  
た、行政の立場や苦勞も理解できるように  
なりました」（島田）  
今回認可された区画整理事業の他にも、  
買収した用地に商店など中心市街地を計画  
する津波復興拠点事業、低地部の買収を行  
う防災集団移転事業など、今後もさまざま  
な事業が続く。

「国で策定した基本計画を元に、基本設計  
は道路・造成・公園・下水など街づくりす  
べてが対象。43億円という非常に大きなボ  
リュームとなりました。通常1年間くらい  
かけて行う基本設計を約3ヶ月間でおおま  
かに決定。時間短縮のため、詳細設計をし  
ながら山の切り崩しなど工事を同時進行し  
てしまおうという、タイトなプロジェクト  
です。しかもCMR方式では基本設計をす  
る人が詳細設計をするわけではないので、

「国で策定した基本計画を元に、基本設計  
は道路・造成・公園・下水など街づくりす  
べてが対象。43億円という非常に大きなボ  
リュームとなりました。通常1年間くらい  
かけて行う基本設計を約3ヶ月間でおおま  
かに決定。時間短縮のため、詳細設計をし  
ながら山の切り崩しなど工事を同時進行し  
てしまおうという、タイトなプロジェクト  
です。しかもCMR方式では基本設計をす  
る人が詳細設計をするわけではないので、

「国で策定した基本計画を元に、基本設計  
は道路・造成・公園・下水など街づくりす  
べてが対象。43億円という非常に大きなボ  
リュームとなりました。通常1年間くらい  
かけて行う基本設計を約3ヶ月間でおおま  
かに決定。時間短縮のため、詳細設計をし  
ながら山の切り崩しなど工事を同時進行し  
てしまおうという、タイトなプロジェクト  
です。しかもCMR方式では基本設計をす  
る人が詳細設計をするわけではないので、

「国で策定した基本計画を元に、基本設計  
は道路・造成・公園・下水など街づくりす  
べてが対象。43億円という非常に大きなボ  
リュームとなりました。通常1年間くらい  
かけて行う基本設計を約3ヶ月間でおおま  
かに決定。時間短縮のため、詳細設計をし  
ながら山の切り崩しなど工事を同時進行し  
てしまおうという、タイトなプロジェクト  
です。しかもCMR方式では基本設計をす  
る人が詳細設計をするわけではないので、

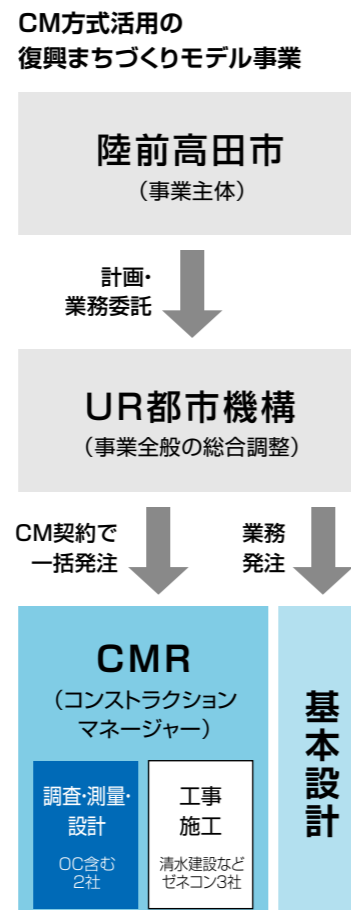


左から伊藤 一彦、斉藤 浩、宮本 直樹、山本 和幸。背景にそびえ立つのは「奇跡の一木」。

復興に向けた検討業務から、街全体の基本計画・CMRへ。  
1つひとつの業務で信頼を得て、大規模案件へと拡大。

※CMR=Construction Managerの略。土木・建設における設計や工事において、中立的な立場で発注者の業務を代行しマネジメントする民間企業(あるいはJV)を指す。

<p><b>島田 智浩</b> (しまだ・ともひろ)</p> <p>SC事業本部 東北支店 震災復興推進室 陸前高田管理所 次工社工務短期大学卒</p> <p>関東支店に配属後、ニュータウンにおける整地設計業務に従事。その後ネクスコ東日本にて岩塊盛土を主体とした施工管理業務を経験。東北支店配属後は事業企画部に営業・総務業務を行い、一昨年より陸前高田震災復興業務に従事。</p>	<p><b>斉藤 浩</b> (さいとう・ひろし)</p> <p>SC事業本部 関東支店 都市デザイン部 主監 東京電機大学卒</p> <p>入社後、関東支店に配属。以来、公園の計画・設計、ニュータウン計画、道路景観、街づくり基本計画など都市計画に幅広く関わる。2012年10月より、陸前高田震災復興支援作業所で、復興業務の管理技術者として従事。</p>	<p><b>宮本 直樹</b> (みやもと・なおき)</p> <p>SC事業本部 東北支店 震災復興推進室 主監 東京理科大学卒</p> <p>阪神淡路大震災での自身の被災経験をふまえて、街づくり計画や道路設計を担当。2011年7月に四国支店長から現職に異動。以来、震災復興関連業務に携わり、陸前高田CMR業務に管理技術者として従事する。</p>
<p><b>山本 陽</b> (やまもと・よう)</p> <p>SC事業本部 関東支店 都市デザイン部 兼 震災復興推進室 技術主査 東京工業大学大学院</p> <p>入社以来、まちづくり計画や公共空間の計画、設計などに従事。財団出向、社会人大学院派遣などを経て、2012年5月から震災復興推進室に所属し、陸前高田の復興業務に従事。復興まちづくりの計画を担当。</p>	<p><b>伊藤 一彦</b> (いとう・かずひこ)</p> <p>SC事業本部 東北支店 事業企画部 プロジェクトマネージャー 東北学院大学卒</p> <p>阪神淡路大震災で被災した港湾幹線道路の橋梁復旧設計に参画した。2012年1月岩手県宮古市に設立した三陸事務所の所長を経て、陸前高田震災復興支援作業所に駐在し、現地関係者からの情報収集や交渉等に従事。</p>	<p><b>山本 和幸</b> (やまもと・かずゆき)</p> <p>SC事業本部 東北支店 震災復興推進室 副室長 鹿児島大学卒</p> <p>入社後は九州支店に配属され、都市計画に始まり交通計画、環境保全などのプランニング業務に従事する。事業企画部長として営業・総務を担当。その後、陸前高田震災復興支援作業所の所長として復興業務に尽力する。</p>



<p>20XX年 将来</p> <p>上) 中心市街地で「うごく七夕(地元の祭り)」を再開しているイメージパース。 下) 嵩上げ部全体の完成イメージ鳥瞰図。JR大船渡線と山との間が造成される。</p>	<p>2014年 現状</p> <p>上) CMRで行っている試験盛土。今後、この天端付近まで全体が盛土される。 下) ベルトコンベアーで運搬される山からの土砂。</p>	<p>OCの業務</p> <p>上) 土地利用計画検討会で模型を指し説明するSC事業本部都市デザイン部の山本 陽。 下) 事業認可された土地利用計画図。山を切って高台とし、平地部を嵩上げする造成計画。</p>	<p>2011年 震災直後</p> <p>上) マンション(市営住宅)の4階の高さまで津波が押し寄せ、人や車を飲み込んだ。 下) 津波により瓦礫(がれき)が大量に発生し、その処理には数年を費やした。</p>
--	---	--	---

写真で見る被災当時と現在

三陸沿岸道路 普代久慈工区の事業促進PPP

エキスパートで構成された民間チームの連携を推進し、復興のシンボル・三陸沿岸道路の早期完成を目指す。



道路の早期完成を図るため、膨大なポリウムの上流工程に着手。

復興のリーディングプロジェクトである、三陸沿岸道路の一日も早い完成に向け、民間技術力を活用した事業促進PPPが導入された。用地取得や調査・設計など膨大な川上業務を進め、短期間での工事着手を図ることがねらわれた。担当する区間は岩手県北部、普代久慈工区の約25km。2012年、清水建設を代表者としたOCを含む民間チームによる、三陸沿岸道路事、

業監理業務がスタートした。

「プロポーザル作成から関わり、担当工区が決まってからはPPPの民間チームで、発注者を支援する事業監理業務を行っています。それぞれ得意とする分野のエキスパートで構成されており、清水建設などゼネコンが施工を、URリネージュが用地を、そして我々が調査・設計を担当しています。ただし、役割分担はあるものの決して縦割りではありません。スムーズに業務を進めるため、相互に連携し合っています。例えば用地を取

得する場合、地権者に設計の方針や道路を造る意義を伝えることで了解を得やすいこともあるため、発注者に行ったり、単独で行くことも多くありました」

そう語る藤原だが、当初は苦労も多かったと笑う。

「業務開始直後は空き物件もなく、PPPメンバー全員でホテルの8畳の部屋に3人で相部屋。でもそのおかげで飲み語り、お互いに仲良くなれましたが(笑)。現在は宮古市にあるプレハブ住宅で宿舍生活。久慈までは往復200km、4時間の自主運転で多い時は週3〜4回、2年間で150回程度通いました。冬季は積雪もあり最低気温はマイナス10℃を超える日もありました」

PPPのメリットを最大限に発揮し、行政・地域住民・民間の全体最適に尽力。

発注者を支援し、民間企業に詳細設計など業務を発注するため、官民や関連機関の立場を理解して調整することが醍醐味だと藤原は言う。

「本件は国交省、つまり国の工事ですが、場所によっては県や市町村の工事が予定されていることもあり。国と県・市町村の立場だと、お互いに譲れないこともあるため、我々民間企業が調整役としてネゴシエーションしていく。地域の復興を最優先に、それぞれの復興事業の事情も考えながら優先順位を提案・調整するのは、会社の中にはできませんから。用地買収や行政・住民の調整をするなど、調査・設計というコア業務の周辺を知る機



復興のシンボル、三陸沿岸道路はこの標識を通過する。

藤原 重雄

(ふじわら・しげお)  
SC事業本部 東北支店  
上級技師長  
岡山大学大学院  
1985年入社。関東・関西支店に約20年間勤務し、北海道から沖縄まで全国の道路分野の業務に従事。その後、関西支店長などを歴任し、2012年より国土交通省三陸国道事務所で官民連携の事業促進PPPに参画。

※PPP…Public-Private Partnershipの略。事業促進PPPの業務は、民間技術者から構成されるチームが、通常、発注者が行っている調査設計に対する指導・調整、地元および関係行政機関等との協議、事業管理等、施工前の業務を発注者チームと一体となって実施する新しい事業の推進方法である。

被災自治体の新たなまちづくりへ向けた地域防災計画

震災復興から、被災地など自治体の新たなまちづくりへ。ソフト・ハード両面から、防災を起点に重点化事業を推進。



被災地の調査や復興手法の検討後、自治体が発注者となる業務に奔走。

OCでは震災からの大規模な復興事業だけでなく、比較的被害の少なかった地域において、災害に備えた街づくりの検討・計画業務にも数多く対応してきた。「震災直後は福島県いわき市の調査に向かいました。現地でNPO活動に携わっている社員を中心に、SC・GCの合同チームを結成し、建物の被災状況の調査のボランティア活動に参加しました」

でした。私は茨城県の沿岸10市町村の調査を担当しました。その後、各市町村において個別に詳細な復興計画の検討に入り、プロポーザルで複数の案件を受注。市町村が発注者となり、北茨城市、高萩市、大洗町、鹿嶋市、神栖市において、復興まちづくり計画、津波避難計画、地域防災計画などの業務に携わりました」

南海トラフなど今後の災害に備え、地域防災や街づくりへと展開。

初めて体験することはなかったが、山川は今回の震災関連業務の経験で大きく成長したと言った。「震災直後の国交省の調査では限られた時間の中、同時並行で複数の調査・計画を実施しなければなりません。管理技術者として経験が浅かったため、社内メンバーや協力企業の管理や調整に苦労しました。防災や津波の知識はありませんでしたが、実際に震災復興にたずさわったことで、その経験が今取り組んでいる防災の仕事に役立っています」

震災復興や防災は、ソフトとハード両面からの課題解決が重要であり、社内各部署との連携や協力会社の支援がなければ成立しません。特に津波対策など防災は震災以降、法改正や新たな法律の制定など関連機関からさまざまなガイドラインやマニュアルが出されており、最新の情報・知識の習得が必要。今後は大学など研究機関を含めた幅広いネットワークを構築し、総合的な提案力を強化することが急務だと思いま



防災・減災の総合提案をするため、パンフレットを作成して全国に展開している。

山川 仙和

(やまがわのりかず)  
SC事業本部 関東支店  
都市地域再生事業部門  
プロジェクト開発部 担当次長  
兼 震災復興推進室  
東京都立大学卒  
1994年入社以来、主に都市計画・街づくり計画を担当。東日本大震災後は震災復興推進室の仕事を兼務し、復興計画、地域防災計画、津波避難計画など防災分野におけるソフト系の業務を中心にたずさわる。

震災から3年以上が経過したものの、復興はまだ序盤戦を終えたばかり。引き続きOCでは被災地の復興、各地の防災事業も含め全社一丸で貢献していく。

「防災の事業を起点として事業を横展開し、インフラ保全・維持管理、エネルギーの地産地消、観光や地域活性化など、官民が連携した総合的なまちづくりを提案したいです」

「仕事として初めて関わったのは、国交省の津波被災市街地復興手法検討業務。これは青森から千葉までの津波被害があった沿岸地域を、ブロックに分けて被災状況を調査し、復興まちづくりの方向性を検討するという業務



技術が受け継がれている

高度な技術を持つ専門家が集結

仕事と育児の両立を目指す

思いを共有できる仲間がいる

笑顔が絶えない職場

日々、成長を感じる

社会に貢献できる

新たな目標にチャレンジできる

海外へのチャンスがある

経験豊富な先輩がたくさんいる

# オリエンタルコンサルタンツの主演は、 “あなた”です!!

さまざまな想いの仲間が集う我が社。そして、未来に向かって前進。

## 1 国内にいながら海外案件を経験

「考えさせる」のではなく自ら「考えられる」コンサルに。

河川港湾部では、打ち合わせ資料の事前レビューを実施するよつに心がけています。これは、工程を管理するだけではなく、多様な意見を出し合うことで、品質と提案力を高めることを目的としています。また、「コミュニケーション能力を高める」一助にもなっていると思います。会社の施策である「グローバル人材の育成」により、SC事業本部もGC事業本部と連携して海外業務を遂行する機会が増えました。私もミャンマーの案件に従事させていただきましたが、社内やローカルスタッフの方々と連携して業務を遂行するためには、物怖じせずにコミュニケーションを図ることが重要であると再認識しました。自分で学ぶ姿勢を持ちながら多様な専門分野の方々に聞く力を身につけることが「考えられる」技術者へと成長できる一歩だと思えます。



同じ部署の木村さん(左)はOCSC海外研修制度を利用してインドネシアへ。今後は海外業務に挑戦したいと考えている。



**岸田 こそえ**(きした・こそえ)  
SC事業本部 関西支店  
技術一部 担当次長  
大阪産業大学卒

河川・砂防に関わる建設コンサルタント会社に入社後、合併に伴いOCに入社。河川関係の国内業務だけでなく、昨年から海外業務にも従事している。

## 2 発注者ニーズの理解と一歩先の提案力

発注者の性格を知り、上手なやり方を真似る。

受注した業務を進める管理技術者の仕事をチェックし、方向を止すのが照査・レビューの仕事です。これには河川分野の幅広い知識が必要。護岸設計など数多くの実績、そしてマネジメント業務の経験が活かされています。大淀川が氾濫する災害が起き、これに対処する案件を一口ポータルで受注。単発の設計だけでなく、効率性を考慮した施工の順序など、工程・予算・施工のステップを発注者と一緒に作り上げる貴重な機会となりました。私が入社した頃は、設計や構造計算が速い技術屋が優秀だとされていましたが、今は発注者のニーズを理解して一歩先の提案ができるかが重要。そのため、発注者の性格を知ることが大切です。私自身は、仕事のできる上司のやり方を真似して成長してきました。技術を深めるだけでなく、伝える提案力を身につけてほしいですね。



大淀川の災害復旧に関する業務であり、当社の総合力(景観、河川、施工計画等)を発揮するとともに、これ以降の河川業務に多大な影響を与えた業務である。



**松崎 宏文**(まつさき・ひろふみ)  
SC事業本部 九州支店  
技術部 技師長  
島根大学卒

入社後、九州支店で構造・河川に関する業務に従事。中部支店、関西支店では河川分野の受注拡大に貢献する。現在は主に河川・砂防分野のレビューや照査に携わる。

## 3 海外研修制度への参加が成長のきっかけ

開発途上国の現状を知った、初の海外プロジェクト。

約1カ月間のスリランカでの研修中、当時のPMに「海外事業に関心がある」旨を伝えたところ、カンボジアでの国道改修プロジェクトへの打診をいただきました。ベトナムとタイを結ぶアジアハイウェイにおいて、通過するカンボジアの国道は狭く、洪水被害も多いため対策を講じる必要がありました。道路面を上げる際、雨量や水位の上昇を解析する水理水文担当として参加。国内と違い、現地では基礎データがほとんどありません。そのためローカルスタッフを雇って住民への聞き取り調査を行うなど、タイムスケジュールのなか大変苦労しました。

世界という視点で事業を考えられるようになったこと。そして、海外事業に関わるという目標ができたことは大きな収穫でした。今後も開発途上国の課題を見つけ、解決できるコンサルに成長したいと思っています。



OCSC海外研修制度の経験を活かし、カンボジアの国道改修プロジェクトに参加。今後も積極的に海外事業に携わる。



**青木 寛匡**(あおき・ひろまさ)  
SC事業本部 関西支店  
技術一部 技術主査  
神戸大学卒

砂防関連の一環として河川計画に関する業務を担当。2012年にOCSC海外研修制度を利用して、スリランカへ。現在は国内・海外のプロジェクトに幅広く従事する。

# 成長のキセキ



自身がコンサルタントとして成長を実感した出来事や、後輩への指導で力を入れていることなど、このコーナーでは、社員の「成長」や「育成」に関するエピソードをご紹介します。

## 4 国内での経験を海外で活用

経験豊富な先輩方への相談により精度を向上。

GC事業本部からSC事業本部に向向し、第二東名高速道路など新設橋梁の設計などを担当していました。経験が浅い頃、時間がない等の理由で自分だけの判断で設計した後、条件や計算方法の誤りが発覚したことがありました。手戻りとなり、手間と時間が余計にかかってしまった。苦い経験から、事前に経験豊富な上司に確認する、その都度疑問が出たら質問するなど、基本を大切にしようになりました。たとえ結論が同じだったとしても、幅広い観点から検討した上でのアウトプットだと、お客様にも納得してもらえやすく、結果的に時間の効率化につながります。

現在はGC事業本部に戻り、海外事業に従事。相手国により異なるニーズを理解し、国内で得た技術・ノウハウにより課題解決に貢献したい。将来的には「ミスター・スズキ」と指名されるよう(笑)、信頼を勝ち取りたいと思います。



ミャンマー国での1枚。橋梁エンジニアが少ないGC事業本部で、先輩社員の小西さんとともに橋梁チームを盛り上げていきたい。



**鈴木 悠介**(すずき・ゆうすけ)  
GC事業本部 道路交通事業部  
道路計画部 技師  
埼玉大学大学院了

学校では土木工学を専攻し、コンクリート構造物の耐震性などを研究。入社後5年間はSC事業本部で耐震補強設計、新設橋梁設計などを担当し国内で経験を積む。

## 5 時短勤務・在宅勤務で充実の毎日

チームの理解と協力により、仕事と育児を両立。

入社して4年目に出産をして復職。育児短時間勤務を申請したものの、担当業務の性質上、繁忙期の時短勤務は実質困難でした。育児中は予測不能な欠勤・早退という事態も少なくないため、OC社員である夫の海外出張中だけは、確実に時短勤務できるよう配慮していただきました。また別途、週1回の在宅勤務を認めていただきました。日・週・月単位で、確実にできることを考えてから行動。営業部は常に締め切りを追われる部署ですが、見事にチームワークで乗り切っています。

出産や育児だけが注目されがちですが、病気や介護など、仕事と家庭の両立は男女を問わずこれからの大きな課題。OCのように、職場が海外となることもある会社ではなおさらです。私の経験を含め、仕事と家庭の両立を前向きに考える組織をめざしていきたいです。



理解ある営業部長(左)と、心強い営業メンバー達。



**高井 由佳**(たかい・ゆか)  
GC事業本部 営業部  
駒澤大学 /  
オハイオ大学大学院了

海外の大学院で国際関係・国際開発について学んだ後、2008年に入社。営業部に国内における受注活動に従事する。2011年8月に出産、2012年6月より復職。

## 6 国際協力NGOの事業統括を担当

被災者雇用や支援団体の評価など、震災復興を支援。

入社した2011年は東日本大震災の直後でした。私は、会社を一旦退職し、被災して仕事を失った方々を緊急雇用し、働いて収入を得られる状況を確認しながら、能力開発・再就職を支援するという被災者雇用の支援を始めました。また、復職後にはプロジェクトリーダーとして将来の国内外での災害対応のための教訓を残すことを目的に、被災地で行われたNGOなど80以上の団体活動のうち、どんな活動が有効で、どんな問題が発生したかといった評価を行うプロジェクトに関わりました。評価にあたっては、支援団体だけでなく行政関係者や支援を受けた被災者など、幅広い意見を収集する必要があります。とりまじめに苦労しました。

今後は、これまでの経験を活かし、開発途上国の生計向上や雇用創出に着目した事業、日本企業の海外進出支援などに取り組みたいと考えています。



日本の中小企業の海外進出支援を実施(カンボジア国)。



**服部 圭介**(はっとり・けいすけ)  
GC事業本部 プランニング事業部  
都市地域開発部  
防災・観光開発グループ 技師  
首都大学東京大学院了

大学院修了後、2011年入社。一時休職し、緊急支援を行う国際協力NGOの事業統括に就任する。2012年復職後は復興関連、民間企業の海外進出案件に従事。

# チーム力向上委員会

国内外の支店や拠点、そして有志のグループでは、チームワークを高める、あるいは知見の共有のため、さまざまな取り組みを行っています。ここではいくつかの事例をお伝えします。

チーム力での対応を強化し、今年度末の退職者ゼロを達成。

衛生委員会においては「1人にしない」「声掛け」「組織での対応」の方向で就労環境の改善を推進した結果、関東支店での今年度末の退職者はゼロ。SC事業本部の課題である社員数の増加に向けて着実に進行中です。毎週水曜日のノー残業デーを社外的にPRするため、定時後の外線電話へのメッセージ対応を実施しています。特定メンバーに偏りがちなWGや委員会を多くの方に経験してもらうため、各種委員会等のメンバーを一元管理し、支店内でのメンバー調整を行い、支店内の横断的なコミュニケーションの増進を図っています。総合マネジメント事業部では、指定管理業務従事者など遠方に滞在する社員も多いため、顔を合わせる機会を創出するように心がけています。



家族を含め、社員一同でのイベントを開催し、交流を深めています。



**蒲田 直子** (かまた・なおこ)  
SC事業本部 総合マネジメント事業部  
プロジェクトリーダー  
明治大学卒

入社後は本社にて品質管理、IR、社長秘書などを担当。2006年より関東支店で公園や駅前広場などの計画・設計に従事。その後、公園などの包括管理業務に携わる。



**堀川 和人** (ほりかわ・かずと)  
SC事業本部 関東支店 事業企画部  
担当次長  
山梨大学大学院了

入社後14年間、関東・九州支店において都市地方計画・交通計画などに従事。その後、関東支店事業企画部に異動し、支店経営・営業管理・労務管理などに携わる。



就業環境を整備して  
組織を活性化

関東支店

アドミニストレーション(管理部門)のスペシャリスト・海外事務所長として活躍できる人材を育成。

スーパーアドミ養成講座は、管理部門を中心に総勢25名で、海外事務所長としての財務・法務・税務・組織運営等の知識を養うことを目的に3年前に設立しました。今期は、毎月第4水曜日に活動中。各回、若手社員とベテラン社員がペアを組み、海外プロジェクト特有の問題について発表し、意見交換をしています。効果的な運営を目指し、発表時間は質疑を入れて、延長なしの1時間に設定しています。これが功を奏して本勉強会は、事業管理や組織運営のことを効率的に学べると好評です。また、四半期に一度、勉強会後に懇親会を開催。メリハリのある有意義な勉強会になっています。



勉強会の様子。ベテラン社員が若手のメンターとなり、プレゼンの準備から内容まで指導することで若手の知識向上を図っています。



**青木 哲也** (あおき・てつや)  
GC事業本部  
営業部  
大阪大学大学院了

2013年入社。配属後は、東京本社にてJICAや各省庁のプロポーサル作成並びに契約交渉を担当。スーパーアドミ勉強会では事務局を担当している。



**Hilman Yoav** (ヒルマン・ヨアブ)  
GC事業本部 契約法務室  
東京大学大学院了・  
イスラエル弁護士資格保有

2012年入社。契約法務室に配属され、様々な海外業務の契約文書の作成並びにドラフトのレビュー。また、各種社内標準契約書の作成に従事している。

スーパーアドミ養成講座で  
海外で活躍できる人材を育成

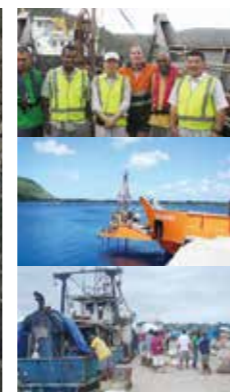
GC事業本部

国内の高度な技術力を海外展開し、バヌアツ国における業務を獲得。

バヌアツ国は人口25万人の小国で、地震の多い地域のため、耐震性の高いコンテナターミナルの建設を望んでいました。そこで、国内の高い技術力を持っているSC事業本部の小林さんに技術的提案や詳細設計を依頼することにしました。これらの提案が高く評価され、今回の業務の受注に繋がったと理解しています。これまでは国内・海外の担当者の効率のみを重視して相互の垣根が高く、交流が少なかったように感じます。今後は部署に拘らず、『オールOCの総合力』で世界に貢献したいと思えます。



左)首都中心から約2kmの建設予定地は周りに観光地が多い。右上)土質調査時の立会検査、左端がバヌアツ政府のカウンターパート。右中)コンテナ岸壁計画地点における土質調査状況。右下)既設岸壁における貨物の荷役状況。



**日野 功** (ひの・いさお)  
GC事業本部 総合開発事業部  
港湾部 参事  
中央大学卒

一貫して港湾・漁港・海岸の計画、設計、施工管理に携わる。入社後4年間は国内業務、その後ずっと東南アジアを中心に海外業務に従事する。

成功に導いた  
SCとGCの連携と協力

SCGC 協業  
プロジェクト

山登りを通じて  
社員が仲良くなる部活動

関西支店

社員やその家族・友人、アルバイトでワンダーフォーゲル部の活動を展開中。

私の入社以前から活動している伝統ある部活動。女性メンバーも多く、軽装で登れる山を選んでいるため、誰もが気軽に参加できます。京都の天王山では山登りの後、ウイスキー工場を見学。また、神戸の六甲山では下山後に有馬温泉へ足を延ばすなど、午前中に登山してお昼を食べ、午後下山してアクティビティを楽しむことが多いですね。私が長く幹事をしてきましたが、今は入社3年目の女性社員が幹事。山登りは自然を満喫でき、お互いに励まし合うなどチームワークを育むのにも最適だと思います。



歴史街道から土木遺産、景勝地までアクティブに活動しています。



**中田 邦彦** (なかた・くにひこ)  
SC事業本部 関西支店  
事業企画部 主任  
京都産業大学卒

入社後は関西支店、京都事務所、四国支店、松山事務所、和歌山事務所などで営業に従事。現在は関西支店で、主に事務系の業務を担当している。